# 成田市（なりた）（千葉県）

# 子育て世代を引き付ける「伝統と未来」の融合都市
# 空港・市場・医療を軸に進める魅力的なまちづくり

## 市制施行から70年／空港開港から45年目のポテンシャル

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、本年ゴールデンウイーク明け（5月8日）に5類に引き下げられるのを前に、空港における水際対策は4月中に順次緩和。成田国際空港・東京国際空港（羽田）・関西国際空港・中部国際空港の4大国際空港を中心に、国際線が就航している全国各地の空港は、にぎわいが旧に復したとは言えないまでも、ゴールデンウイークの期間中、久しぶりに出国ラッシュ・帰国ラッシュの光景が復活した。

5月12日に東京出入国在留管理局が発表したゴールデンウイーク中（4月28日～5月7日）の出入国者数によれば、成田国際空港が56万6040人、東京国際空港が40万1770人だった。コロナ禍前（令和元／2019年）の同時期に比べると、成田国際空港は約5割、東京国際空港は約7割の水準まで回復したことになる。

ちなみに、関西国際空港の本年ゴールデンウイーク中の出入国者数は38万6220人、中部国際空港は5万9500人だった。また成田国際空港の出入国者数のうち、外国人は37万6060人、日本人は18万9980人だった。

折しも、成田山新勝寺（天慶（てんぎょう）3／940年創建）と、その参道周辺において、同寺・本尊の不動明王像を敬刻開眼したとされる弘法大師・空海の生誕1250年祭が開催（本年4月28日～6月18日）されている成田市内には、ゴールデンウイーク期間中を通じて、成田国際空港の利用者を含めた、国内外からの観光客が数多く訪れたことも報道されている（本欄の現地取材は本年3月20日）。

世界中の主要都市と直結する成田国際空港の存在、および国際空港を擁するまちにふさわしい現代的な中心市街地。それと、空海生誕1250年祭で沸く成田山新勝寺の創建以来、門前町として1000年以上もの長い歴史を刻んできた表参道のレトロなまち並みとの対照の妙は、成田市を象徴する景観的なハイライトと言える。

一方で、千葉県の北部中央、房総半島の北東側入り口に位置する成田市は、市域北側が利根川を隔てて、千葉県と共に日本有

小泉一成（こいずみかずなり）
成田市長

数の農業地帯を形成する茨城県との境界部に接し、市域西側は県立自然公園・印旛沼に面している。さらに北部の利根川に加え、西部には根木名川が、東部には大須賀川が流れているなど、成田の地は、古来、水資源に恵まれた田園地帯として知られてきた。

現在も随所で、水田を中心に広大な耕作地帯が形成されており、特に米、サツマイモ、レンコン、クリームスイカ、豚肉など、生産量と品質共に全国的な定評のある成田市農業の実力は、県内上位の農業産出額を毎年記録していることを含めて、農業の盛んな千葉県内でもひときわ目立っている。

このように「日本の空の玄関口・成田国際空港のあるまち」「1000年以上の歴史を持つ成田山新勝寺の門前町」「優れた農畜産物を産出する関東地方でも指折りの田園都市」という「三つの代表的な顔」を持つ成田市は、昭和29（1954）年3月31日、旧印旛郡成田町・公津村・八生村・中郷村・久住村・豊住村・遠山村の1町6村の合併により市制施行。令和6（2024）年3月末で70周年の節目を迎える（平成18／2006年には旧香取郡下総町・大栄町も編入）。

その間の成田市の成長ぶりは、市制施行時に4万5075人だった人口が、本年3月末日には13万1148人になっていたことを挙げただけでも一目瞭然だろう。

「特に市制施行から24年目の昭和53（1978）年5月20日に成田国際空港が開港したことが、成田市を包む環境面の全てにおいて、特大のインパクトをもたらしました。成田国際空港が開港してから今年で45年目となりますが、この45年間は成田市にとって、まさに都市としての急成長期だったと言えます」

そう語るのは、小泉一成成田市長だ。成田市出身の小泉市長は、大学を卒業後に実業界（家業の旅館業）で活躍。平成6（1994）年に成田青年会議所理事長、平成7（1995）年からは成田市議会議員（2期）を経て、平成19（2007）年1月に実施された成田市長選に出馬し当選。本年1月から5期17年目を迎えている。

国際空港の存在だけでなく、成田市には東京都心部から50㎞圏内という地の利もある。古くからの門前町であり、田園都市だった成田市は、空港の設置が決まった昭和41（1966）年の直後から、中心駅の成田駅を経由し、都心部と空港を直結する鉄道の敷設や延伸（現成田スカイアクセス線やJR成田線など）が行われた。さらに、当初の計画人口6万人とされた成田ニュータウンを

成田国際空港のにぎわいはウィズコロナ時代の本格化と共に復活しつつある（本年5月撮影）

「成田空港の更なる機能強化」と共に成田市のまちづくりも一層進化を遂げる

成田ニュータウンは豊かな自然環境の中、戸建住宅・集合住宅による八つの住宅地区で構成されている（写真は北部地区・成田湯川駅前エリア）

弘法大師生誕1250年祭に沸く成田山新勝寺は成田市を代表する「伝統的な顔」だ

成田山表参道は外国人旅行者に大人気（新勝寺と参道は日本遺産～北総四都市江戸紀行～で認定）

はじめ、さまざまな開発計画が立案・実行され、宅地化（ベッドタウン化）の急速な進行とともに、人口も右肩上がりに急増していった。

「平成30（２０１８）年ごろを境に人口は少し横ばい気味の傾向を呈してはいますが、社会保障・人口問題研究所（社人研）による人口予測でも、成田市の人口のピークは令和７（２０２５）年（13万３６９３人）とされています。成田市人口ビジョンでは、多角的な地域活性化施策の実践により、人口のピークの訪れを令和27（２０４５）年まで延ばすことを想定しています」（小泉市長）

その要因となり、原動力ともなるのは、「やはり、機能強化をさらに進めつつある成田国際空港の存在」だと、小泉市長。

「成田市では『成田空港の更なる機能強化』を踏まえ、成田市総合計画（ＮＡＲＩＴＡみらいプラン）に基づきながら、空港関連企業従事者の受け皿づくりを強化（※空港の機能強化に伴い空港内従業員数は約４万人から７万人に増加する見込み）すると共に、空港と周辺地域が持つポテンシャルを最大限に活用したまちづくりを進めていきます。従って、決して楽観的な観測ではなく、成田市ではそれなりの自信を持って、人口のピークを迎えるまでにはまだ、しばしの猶予があるはずと考えております」（小泉市長）

## 空港機能強化と国家戦略特区の活用で目指す持続可能なまち

成田国際空港の開港以来、空港の機能強化とともに右肩上がりに増え続けていた成田市の人口が、平成30年ごろを境に若干、横ばい気味になったという現象の背景には、明確な理由がある。国の方針に基づき、東京国際空港が令和２（２０２０）年３月以降、新飛行経路の運用開始とともに、国際線の大幅増便に踏み切った。それに伴い、成田市在住の航空人材の一部の移動が、平成30年ごろから始まった。成田国際空港の警備体制の見直しによる警備隊縮小という、空港の内部構造的な変化もあった。コロナ禍の影響で、航空関連・観光関連の民間事業が、一時的に縮小したことなども影響した。

「しかし、それも令和４（２０２２）年２月を底に、徐々に回復基調となっています。加えて、今後Ｃ滑走路の増設を含めた、『成田空港の更なる機能強化』が本格化していきます。さらに、コロナ禍が明けることなどにより、全体的な人とモノの流れの活発化が見込まれるなど、さまざまな側面からのにぎわい復活が、大いに期待される状況が出そろいつつあると言えます」（小泉市長）

「成田空港の更なる機能強化」に伴う、国際空港都市としての成田市のさらなる基盤整備は、当然、「人口のピーク」の「その後」を見据えた、「持続可能な近未来のまちづくり」のための多角的な取り組みとも有機的に連動してくる。

前出の総合計画・ＮＡＲＩＴＡみらいプランでは、まちづくりの基本姿勢の一つとして、「空港と共に発展するまちづくり」を

掲げている。この基本姿勢には、成田国際空港と共に発展してきた成田市が「『成田空港の更なる機能強化』を絶好のチャンスと捉え、これまで培ってきた国際空港都市としての経験や実績を生かして新たな産業の集積に取り組む」など、小泉市長の談話にもある「空港と空港周辺地域の持つポテンシャルを、最大限に活用したまちづくりを目指す」上での、考え方の「ベクトル」が、如実に示されていると言える。

空港と空港周辺地域の持つポテンシャルが相乗効果となり、より幅広い付加価値を生み出しつつある成田市の代表的な施策の事例としては、国家戦略特区による規制緩和の提案をきっかけに実現した「ワンストップ輸出拠点機能を備えた卸売市場（新生成田市場）の空港隣接地への移転再整備」事業と、「国際医療福祉大学医学部の開学および附属病院の開院」事業が挙げられる。

成田市にはこれまで、飯仲地区に昭和49（1974）年に開場した成田市公設地方卸売市場（旧成田市場）があった。成田国際空港の開港や成田ニュータウンの建設などに伴い、人口の急増とともに、生鮮食品の需要が急増したことを受けての開場だったが、施設の老朽化、耐震性不足などの課題を抱え、平成25（2013）年から、市場の再整備を含めた今後の在り方について本格的に検討されるようになり、令和4年1月、空港隣接地である天神峰地区での開場に至った。

新生成田市場は、水産棟と青果棟を軸に、高機能物流棟、関連食品棟、集客施設棟の五つの棟で構成されている。この成田市場の空港隣接地への移転・再整備と共に図られたのが、「ワンストップ輸出エリア」など、特徴的な「四つの新機能（エリア）」の設置だ。

「四つの新機能」を代表する「ワンストップ輸出エリア（高機能物流棟）」では、農水産物の輸出に必要な検査や通関など、従来は各管轄機関に出向き、個別にやり取りしなければならなかった煩雑な輸出手続きを、市場内で一括して実施できる機能を持つ。さらに全国から集めた農水産物の加工や、パッキングなどを行う「加工エリア（高機能物流棟）」、災害などによる長時間の停電発生時でも運転可能な「冷蔵冷凍庫エリア（高機能物流棟）」、国内外のマーケットを対象に活きの良い魚を売り込むことで、新たな販路拡大を図るために整備された「活魚水槽エリア（水産棟）」が四つの新機能の内訳だ。

「中でも、ワンストップ輸出エリアは、国

ワンストップ輸出エリアで実施されている植物検疫

活魚水槽エリアでの作業風景

成田産のイモ類は全国有数の生産高を誇る農業県・千葉県の代表的な品目の一つ

レンコンは成田市下総地区の特産品として年間を通じて全国に出荷されている

令和2年開院の国際医療福祉大学成田病院は成田赤十字病院と共に早くも地域医療の要になった

国際的に活躍する医師の養成が期待される国際医療福祉大学成田キャンパス医学部棟

内でも唯一無二、世界の主要都市と直結する成田国際空港が市内に立地する成田市ならではの、類例のない市場機能と言えます。

このワンストップ輸出エリアの機能によって、例えば県内の銚子漁港から早朝に市場へ運ばれてきた水産物や、成田市内をはじめ、各地で収穫された朝採れの野菜類なども、東南アジアの主要都市でしたら、当日の夕方までには店頭に並ぶという、従来には全く考えられなかったことも可能になったのです」(小泉市長)

## 国際医療学園都市構想とエアポート都市構想が描く近未来

平成29(2017)年に新設された国際医療福祉大学医学部および、令和2年に開院した国際医療福祉大学成田病院の存在は、成田市が進める国家戦略特区の指定に当たって掲げた「国際医療学園都市構想(平成25年策定)」の大きな柱となる施設だ。

成田市の「国際医療学園都市構想」に基づく誘致と、国家戦略特区の規制緩和による、首都圏43年ぶりの医学部新設の実現を受けて、国際医療福祉大学成田キャンパスが竣工(しゅんこう)し、第1回目の入学式を行ったのは、平成28(2016)年4月。成田看護学部と成田保健医療学部の2学部体制での開学だった。

もともと「国際貢献できる医療福祉専門職の養成」に特化し、外国人留学生を数多く受け入れてきた国際医療福祉大学(開学は平成7年)にとっても、国際空港を通じ世界主要都市と直結する成田市にキャンパスを構えるメリットは大きかった。

現在では国内5カ所にキャンパスを構え、総計10学部26学科、大学院を含めて約1万人の学生を擁する国際医療福祉大学が、成田市と共に医学部の新設を目指し、国へ共同提案を行ったことからも、それは容易に推測できる。

「国際医療福祉大学成田キャンパスには現在、約2500人の学生が在籍しています。これまでも看護師、理学療法士や作業療法士など、医療福祉の専門人材を多数輩出してきました。今年はそれに加え、記念すべき医学部(6年制)最初の卒業生125人が、成田キャンパスを巣立ちました(※本年3月12日に学位授与式挙行)。

医学部は毎年20人の留学生を受け入れるとともに、1・2年次の多くの授業を英語で実施するほか、世界水準を上回る90週の診療参加型臨床実習を実施。6年次には世界各国の大学病院や医療機関での臨床実習も必修にするなど、国内ではまれに見る、総合的な診察能力と国際性を兼ね備えた医師の養成を目指しています。

成田市の国家戦略特区『国際医療学園都市構想』の最大の目的の一つは、広域的な地域医療への貢献とともに、日本の医療が国際展開を図る上で不可欠な、海外で病院を運営するような医師や医療福祉専門職の養成を、強力にサポートすることにあります。それだけに、この春、医学部第1期生を社会に送り出せたことは、成田市にとっても、この上ない喜びなのです」(小泉市長)

ちなみに厚生労働省が本年3月16日に発表した「第117回医師国家試験の学校別合格者状況」によると、新卒者合格率の全国平均は94・9%だった。それに対し、国際医療福祉大学医学部の新卒者125人の合格率は99・2%という、実に素晴らしい成績を収めている。

しかも、そのうち15人は外国人留学生が占めており、一つの大学医学部から15人もの留学生が医師国家試験に合格するのも「異例」との高い評価が、関係各方面から寄せられている。

国際医療福祉大学医学部のこの素晴らしい門出に加え、かねてより成田市の医療体制を支えてきた成田赤十字病院と共に、早くも周辺広域エリアの地域医療を担う存在となった「国際医療福祉大学成田病院」（令和2年3月開院）もまた、「国際医療学園都市構想」の輝かしい成果の一翼を担うものだ。さらに、同院周辺では、大学の関連施設となる特別養護老人ホームおよび介護老人保健施設などを併設した「成田老年医療福祉センター」の開所も、令和6年度に予定されている。

その他にも、医療に関する成田市独自の施策として「高校生の医療費助成制度（令和4年～）」が実施されるなど、子育て世代が「ずっと暮らしたくなるような施策」も、成田市では拡充化の一途だ。

コロナ禍で中止が続いた恒例「成田伝統芸能まつり」も令和4年に復活（上は春の陣、下は秋の陣の様子）

以上、ご紹介してきたように、国家戦略特区の提案をきっかけに実現した二つの事業への取り組みも含めて、成田市の持続可能なまちづくりは、本稿冒頭近くで述べた「成田国際空港のあるまち」「成田山新勝寺の門前町」「関東地方でも指折りの田園都市」という「三つの代表的な顔」を核とする地域財産（資源）のさらなるブラッシュアップが鍵を握っている。

それらの取り組みを包含しつつ、平成25年に掲げた「エアポート都市構想」において、成田市は成田国際空港を軸に「広域観光」「スポーツツーリズム」「物流拠点化」「企業誘致」の推進を発信している。

移住・定住人口の誘致促進、交流人口の増大化にも効果的と思われる同構想の推進は、コロナ禍の影響を受け、これまでは道半ばの状態でとどまっていた。しかし、本年度末に迎える市制施行70年の節目を前に、国際空港と周辺地区のポテンシャルを生かした成田市のまちづくりは今、ウィズコロナ時代への移行と共に再び芽吹き始め、同時多発的に花開こうとしている。

このままいけば、社人研が令和7年と想定し、成田市人口ビジョンが令和27年と想定している「人口のピーク」の訪れは、さらに「もっと先の話」に、なりそうである。

（写真・文＝遠藤隆／取材日＝令和5年3月20日）

各種スポーツ大会を観光の目玉とするスポーツツーリズムは成田市重点施策の一つ（平成30年開催の第12回世界女子ソフトボール選手権）